

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER

ケンビレター

no.110

2021. summer



ミロコマチコ

いきものたちはわたしのかがみ

2021(令和3)年7月24日[土]ー9月20日[月・祝]

ミロコマチコさんは、食通や美食家の財界人・文化人が、対談やエッセイ、厳選店紹介などに登場する月刊誌「味の手帖」の表紙イラストを2015年から描いています。2018年4月号の表紙を飾ったのは「カツオのたたき」。これはまさに、厚切りの切身を塩と薬味で味わう高知の塩タタキ。香ばしいカツオと薄くスライスされたニンニクが…たまりません!

ミロコマチコ

Creatures are my mirror mirocomachiko



〈ドクルジン〉2019年



〈海の呼吸〉2020年



〈月の光〉2021年

いきものたちはわたしのかがみ

ミロコマチコさんを知っていますか。高知こどもの図書館で行われた「ミロコマチコ絵本原画展」(2014年)をはじめ、店主と共通の知人を介したご縁で行われた南国市にあるアジア食堂・歩屋における個展やイベント、県内在住の布作家・早川ユミさんの著書『野生のおくりもの』(2017年、アノニマ・スタジオ)の装画やコラボ展など、実は高知にゆかりのあるアーティストです。作品はもちろん、ご本人をご存じの方もいらっしゃるかもしれません。大阪府で生まれ、父親が大阪弁で每晚読み聞かせてくれた絵本で育ったというミロコさん。県出身の絵本作家・田島征三さんの『しばてん』(1971年、偕成社)もその中の一つでした。その後、高校生の頃に親たみハヤシエ・エンデの『モモ』を原作とした人形劇をきっかけに、大学ではもっぱら人形劇の制作に動いたそうです。美大出身のアーティストが多いなか、大学を卒業してから絵本づくりを学び、本格的に絵を描きはじめてミロコさんは、少々異色の存在とも言えます。常識に捉われず、豊かな発想で、さまざまな生物や植物が画面から飛び出さんばかりの勢いで描かれる作品は、そのような経歴が要因の一つかもしれません。デビュー絵本『オオカミがとぶひ』(2012年、イースト・プレス)の第18回日本絵本賞大賞受賞をはじめとして、『てつぞうはね』(2013年、ブロンズ新社)、『ぼくのふとは うみでできている』(2013年、あかね書房)、『オレときいろ』(2014年、WAVE出版)が立て続けに国内外の絵本賞を受賞し、ミロコさんは新作が常に期待される絵本作家のひとりとして活躍しています。いっぽう、即興で描くライブペインティングや、書籍やCDなどの装画、『山形ビエンナーレ』(2016年)への野生動物と人間の共生をテーマとした山車型の立体作品《あっちの耳、こっちの目》の出品など、活動は多岐におよび、作風も変化しています。本展では、美術館全体を使い、高知会場から出展する新作を含め、ミロコマチコの「現在」を多角的に紹介します。

奄美大島に行ってみました!

勝手に「春休み」と称し、早川さんと同行して奄美大島のミロコさんの新居兼アトリエを訪ねました。2年前に夫と4匹の猫とともに、東京から奄美大島に移住したミロコさん。「実際に見えなくても、いきものの気配がムンムンする」という島で描かれた作品は必見! 文・長山美緒(当館主任学芸員)



1.アトリエには完成間もない作品が!高知で初披露です。 2.アトリエの目前に広がる浜辺にて。左:早川さん、右:ミロコさん
3.島の工房、金井工芸でテーチ木染めや泥染めを用いた作品を制作。描いた絵を大胆に藍染めの瓶につけるミロコさん。

2021(令和3)年7月24日[土] - 9月20日[月・祝] 9:00-17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

観覧料 = 一般前売 960円、一般当日 1,200円(960円)、大学生 850円(680円)、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体割引料金。※年間観覧券所持者は無料。
※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。

主催 = 高知県立美術館 / 朝日新聞社 / KUTVテレビ高知

後援 = 高知県教育委員会 / 高知市教育委員会 / KCB 高知ケーブルテレビ / エフエム高知 / 高知シティFM放送

協力 = 亜紀書房 / 朝日出版社 / 朝日新聞出版 / 味の手帖 / iTohen / 岩崎書店 / 幻冬舎 / 講談社 / 小学館 / newton / プレメム / ブロンズ新社
認定NPO法人高知こどもの図書館

展覧会グッズ 充実の公式カタログやステキなオリジナルグッズもたくさん!



左:大きな木綿のバッグ
中央:大きくて丈夫なグラス
右:ガチャガチャで販売するピンバッジ

没後100年 マックス・クリンガー版画展(後期)

昨年当館の主要な収蔵作家のひとり、マックス・クリンガー(1857-1920)の没後100年にあたりました。これを記念し、待望しい展覧会として、前・後期に分け総点数274点の大部分を展示する予定でしたが、前期展が始まってわずか1週間で、コロナ禍により休館を余儀なくされることになりました。再開後の会期が1ヶ月足らずであったため前期を継続、後期は別の機会にということになりましたが、今回、満を持して後期展を開催いたします。クリンガーが制作した版画集を年代順に紹介しているので、後期展は作家がドイツの美術界に君臨した全盛期から晩年までの作品が出品されます。1889年から制作が始められた、世紀末の雰囲気濃厚な《死について》2部作や、ブラームスの歌曲にイメージを加え、音楽・文学・美術の総合を目指した《ブラームス幻想》など、クリンガーの代表的な作品を存分にご堪能いただけます。また、今回は最晩年の大作《天幕》全46点を一挙に公開します。全作品が並ぶのは、今回が実に25年ぶりとなります。この機会をぜひお見逃しなく。 文・奥野克仁(当館学芸課長)



〈死について 第二部〉から《哲学者》第2版:1910年(初版:1898年)



〈ロイカルト学位記(ベネロベ)〉1895年

2021年5月26日[水] - 7月16日[金]

1階第4展示室

9:00-17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

展覧会報告

本城直季展オープニング記念トーク開催

「本城直季 (un) real utopia」が5月22日(土)に開幕、初日には本城さんのスペシャルトークを開催しました。この日のために新しいヘアスタイルに挑戦されるなど、気合十分で臨んでくださった本城さん。作品の魅力はもちろんのこと、穏やかで誠実な人柄が伝わるお話しぶりに、多くの方が惹きつけられていました。内容の一部をご紹介します。



ヘリを使った撮影について話す本城さん

Q. 上空から高知を撮った印象は?

A. 山のほうから撮っていったのですが、河川が山から海に向かって流れているのが印象的でした。街中にも大小さまざまな橋があって、水が豊富なんだと感じました。「自分の街を知りたい」という思いで撮影しているのですが、東京みたいな大きな都市だと自分の暮らしが見えないんです。高知のように海や山が近いと、自然からの恵みがあるから暮らしていけるということが、すごくわかるなと思いましたね。

Q. 本城さんの写真はどのようにミニチュアのように見えるのでしょうか?

A. 普通、遠くの風景を撮った写真はすべてにピントがあっているのに、僕の写真は、一枚のなかで真ん中にだけピントが合って、上下がボケているんです。それは近くの物を見ているときのボケ方と同じで、遠くのものが近くにあるように感じるの、ミニチュアのように見えるのかな、と思います。また、人の目は、意識している部分にしかピントを合わせられないので、僕の写真は、人の視線に近いとも言えるんですよ。

Q. 展覧会の見どころは?

A. 今回、個々の作品を大きく引き伸ばしているの、写真集などでは見えない細かいところまで見ると、流れるプールを撮影した作品は、覗き込んでよく見てみると、遊んでいる親子とかイヤイヤしてるカップルとかが隠れていて……一枚の写真のなかに色々な物語や登場人物を発見してじっくり見られるのが醍醐味かもしれません。

MUSEUM HALL INFO

美術館ホール 報告

高知ライブエール・プロジェクト

Co.山田うん「いきのね」 ◎2021年2月11日(木・祝) 美術館ホール

昨年秋から半年間にわたって行ってきた高知ライブエール・プロジェクト。本公演はそのなかでも目玉といえる企画で、2019年の横浜公演を見た藤田館長の「この作品をぜひ高知で」という熱い思いから上演が実現しました。この作品は元々、愛知県奥三河地方で700年以上にわたって受け継がれてきた神事芸能「花祭」へのオマージュとして創作され、あいちトリエンナーレ2016で初演されました。土間で一晩中舞を繰り広げる花祭に倣い、本作でも舞台上に土を敷き詰めて土間を作り、ダンサー達はその上で踊ります。使用する土の量はなんと10トン！せっかくなら高知の土で行いたいという当館の希望が叶い、振付の山田うんさんのチェックを経て、県内の土俵にも使われている春野の土を使うことになりました。土の搬入は、舞台監督を中心に20人の舞台スタッフで丸1日半かけて行い、舞台が完成した後も、毎日10人のスタッフがダマになった土の塊を取り除き、平らに均し、水を撒いて整えました。

まるで土木工事さながらの舞台設営と共に大変だったのが、リハーサルが佳境に入った1月から2月の公演まで、カンパニーが拠点を置く東京都に2回目の緊急事態宣言が発令されていたことです。多くのスタジオや体育館が夜間の貸し出しを中止するなか、カンパニーは使用可能な稽古場を渡り歩き、冬の夜であっても窓を開け、息苦しくてもマスクをつけてリハーサルをしていたとのこと。カンパニー側でも万全の感染対策を行っていましたが、念のためにダンサーとスタッフには高知入りの直前にPCR検査を受けていただき、全員陰性であることを確認した上でお迎えしました。

公演当日は、当館で以前上演したCo.山田うん「春の祭典」(2015年)、「雅歌」(2018年、向井山朋子構成・演出)をご覧になった方、香南市出身のカンパニーメンバー、山根海音さんのダンス仲間、民俗芸能の愛好家など、幅広い層のお客様にご来場いただきました。当館としても2年ぶりのダンス公演でしたが、カンパニーにとっても1年3ヶ月ぶりの有観客での劇場公演で、ダンサー達はお客様の前で踊れる喜びを口にしていました。終演後のお客様の熱のこもった拍手と、アンケートにびっしりと書かれた長文のご感想が非常に印象的でした。作品の持つ無病息災、鎮魂への祈りのメッセージと、ダンサーたちの肉体が放つ圧倒的なエネルギーが、この状況だからこそ多くのお客様の心を打ったのではと思います。文・折田彩(当館企画事業課主査)



左:公演の様子 右:舞台上に土を敷き詰めて準備をする舞台スタッフ

カンパニーデラシネラ「はだかの王様」

◎2021年3月6日(土)―7日(日) 美術館ホール

華麗なマイムの動きでドアやテーブルなどのモノにまで感情や命を吹き込み、今や大河ドラマ「青天を衝け」にも出演するカンパニーデラシネラ。代表の小野寺修二さん、藤田桃子さんが2001年にパフォーマンス・グループ「水と油」の公演「見えない男」で当館に初登場してから20年目という節目の年に新作公演を行いました。これまでに高知県立美術館発「古典名作劇場」として第一弾「ロミオとジュリエット」(2011年)、第二弾「ドン・キホーテ」(2017年)を上演し、今回は第三弾です。このシリーズの特長は舞台と客席が分かれている劇場ではなく、「ひらかれた場所」でパフォーマンスを行うということです。そのため野外や小中学校の体育館で上演され、2作品とも息の長い公演となっています。今回も最初に小学校で出前ワークショップ、出前公演を行う計画でしたが、長引く新型コロナウイルスのため、ワークショップは中止となり、出前公演も1校は中止となりました。かろうじて土佐町小学校で全校生徒の前で公演を行うことができました。密を避け距離を十分にとった公演となり、セリフがないため生徒さんの反応はどうかと思っていましたが、デラシネラのメンバーが作り出す滑らかな動きと豊かな表情に低学年の生徒さんは大爆笑。時短要請などが出ていた東京では稽古場の確保が難しく、十分な稽古が出来ないので、今回は高知に長期滞在してもらい本番に臨みました。作品は目にも止まらぬダンスの動きと、マイムで培ってきたダンスとはまた違う体の動きと表情の作り方、プロダクトデザイナー・石黒猛氏が作り出す驚きの小道具と美術家・杉山至氏による想像を絶する合体型美術もあいまって、マイムとダンスを結合させた舞台が見る人を異空間へと導いてくれました。

文・浜口眞吾(当館企画事業課課長補佐)



撮影:釣井泰輔 土佐町小学校での出前公演の様子

青山実験工房 ～サティ・武満徹・フェルドマンと能との出会い～

◎2021年2月16日(火) 高知県立美術館 能楽堂

青山実験工房が、能楽を基盤に幅広い舞台上で活躍する能役者・清水寛二の呼びかけで現代音楽、舞踊、演劇、美術、能楽による総合的な表現を試みる場として活動を開始したのが2018年。常に新しいことにチャレンジしている青山実験工房は、可動式の能舞台を格納庫に置いたまま、通常のステージを沈下させてそこにピアノと客席を設置するという当館でも初の試みとなる舞台空間を出現させて上演を行いました。能楽という600年以上も続く日本の伝統芸能と武満徹やモートン・フェルドマンなどの現代音楽とが舞台上で溶け合い、それに映像も加わって今まで誰も見たことのないような不思議な空間と旋律が印象的な公演でした。

文・浜口眞吾(当館企画事業課課長補佐)



撮影:釣井泰輔